

館蔵品から⑧

歌川広重(1797-1858[寛政9-安政5])

《隷書東海道五十三次〈三条大橋〉》

1847-51(弘化4-嘉永4)年頃

木版画

21.3×24.3cm

UFJ銀行寄贈

流行の衣裳を身に着けたひとびとが行き交う三条大橋。その背後には、寺院の麓を中腹にいただく東山がつづく。政治・文化の中心が江戸に移ってもなお、憧れの地でありつづけた都の情景を描いた一点である。経済的理由で実際に京を訪れることができない庶民も、安価な浮世絵を手することで、京の地に想いをはせることができたのであろう。浮世絵は、手の届かない知識を身近にする役割をも担っていた、といってもいいすぎではない。

ところで、広重の作品は、江戸時代の庶民だけでなく、当館で展覧会を予定している日本画家・

池田遙邨(1895-1988)にも大きな影響を与えたようだ。遙邨は、「私が、つとに共感し敬慕することは、日本人の自覚と日本人の心で日本の風土と自然を賛美し熱愛して純真で忠実に独自の画境、画風とを拓いた作家は広重においてはほかにあるまいと思う。(略)」と広重を絶賛、自ら徒歩による東海道写生旅行を決行し、《東海道五十三次図絵》や《昭和六十余州名所》を完成させている。必ずしも実体験をもとにしていたわけではなく、先行する諸資料等も利用して図様を構成、雪月花の伝統的な美意識や俳趣味で情趣に富む風景作品を仕上げた広重と、旅を愛し、写生をもとに魅力的な風景画を描いた遙邨。描かれた時代も制作方法も全く異なるが、日本の自然あるいは風土を重んじた両者の描きだした風景は、時を経た今もなお、静かに深くわれわれの心をうつ。(《東海道五十三次図絵》他、遙邨の代表作約80点が出品予定の【生誕110年記念 池田遙邨展】は11月20日から1月9日三重県立美術館で開催予定)(Mm)

